

へくジモノくくと接辞ジ

村 島 祥 子

一 はじめに

へくジモノくくという上代特有の表現には、「まるでくくのように」と現代語訳できる例とできない例があることで知られている。⁽¹⁾

…世の中を 背きし得ねば かぎるひの もゆる荒野に
白たへの 天領中隠り 鳥じもの「鳥自物」 朝立ち
い行きて 入日なす 隠りにしかば 我妹子が 形見
に置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに 取り委す
物しなれば (2) 男じもの「男自物」 わき挟み持ち…

(2)三三

(1)の「鳥じもの」は、文脈から妻の死を鳥の朝立ちに喩えていると考えられ、注釈書類で「鳥ではないのに」「まるで鳥のように」と解釈されている。だが、(2)の「男じも

の」は、「男ではないのに」でも「まるで男のように」でも意味が通らない。男である作中人物「我」が「男ではないのに」「まるで男のように」赤子をわき挟みしていると解釈することはできない。そこで注釈書類は、この「男じもの」だけを他のへくジモノくくとは別に取り扱い、「男なのに」「男のくせに」「男らしくもなく」といった文意が通る別の解釈をあてている。

へくジモノくくを含む接辞ジの研究に先鞭をつけた論文は、橋本四郎（一九五五）「上代の形容詞語尾ジについて」『万葉』一五号）である。橋本論はまず、万葉集の「時じくの」〔等伎自久能〕香果（^{かくのこのみ}⑩四二二）が同内容に該当することから、接辞ジが「否定の意を内蔵していたことは明瞭」と述べ、同じく否定の意をもち形態も一致する打消推

量の助動詞ジと「ズよりも実現の可能性を濃く残している」「否定されるべきことを示すとともに肯定されるべき点も残している」点で意味的に共通していると論じた。その上で、「時じ」とへじモノのジを同一のものとは見なし、へじモノは「…ではないがまるで…のよう」、現代語の「くじやないけれど」に近い比喩の「形式と結論づけている。へじモノ」を他のジと関連づけて意味・文法の両面から統一的に理解しようと試みた論であるが、問題点も少なくない。まず、同形態であっても接続の違うことばの意味を同一線上で見比べるのは難しい。また、熟字訓の場合、否定の表記であっても必ずしも否定語であるとは限らない。さらに、「男じもの」「畏じもの」は橋本論の理解では括りきれず、「体言」＋「ジモノ」といふ同一形態をもつが故に同一の点で理解せねばならぬ理由はない」として、例外としなければならぬのはくるしい。その「男じもの」を「男らしくないと反省する気持ち」と、それに対して男だと反発する気持ちの複合したもの」と理解するが、「…ではないがまるで…のよう」と「…らしくなく」は意味の上で遠く、文脈から推しても(2)の「男じもの」に男としての反省や反発を読みとるのは不自然であろう。そもそも、原田芳起(一九七四「上代の形容詞性接尾辞「じ」―打消か類似か―」『檀蔭国文学』12)が指摘するように、

日本語全体の様相から考えて、体言相当に直接下接して上接語を否定する否定の接尾辞が存在するとは考えにくい。そこで原田論はへじモノのジを否定語とせず、元は類似「くのような」の意であった表現が意味が似ていることから二次的に否定「くでない」の意を内包するようになったと論じるが、問題の「男(畏)じもの」には触れていない。「男じもの」は「男のように」「男ではないのに」のどちらでも解釈できず、原田論でも例外とせざるを得ないだろう。以降、橋本論の例外説に異を唱えた論文は見あたらない。しかし、同作家の同作品中に使用されているへじモノはやはり同一の表現であり、統一的な機能を有していたと考えるのが自然である。本稿は意味的にも文法的にもまだ把握されているとは言いがたいへじモノという表現、ひいては接辞ジの機能について、統一的に理解することを試みる。

二 へじモノ

まず、へじモノが用いられる文脈には傾向がある。すでに和田明美(一九八二「上代語「じもの」について―特に「男じもの」を中心として―」『訓点語と訓点資料』67)が、へじモノが用いられた歌の作歌状況は死や別れなど「悲しむべき事態」に限られていると指摘し、

へくジモノには「憂いや嘆きの心が伴われている」と論じている。部分的には首肯されるが、へくジモノは民が天皇に仕える場面にも用いられている。

(3)：真木さく 檜のつまでを もののふの 八十字治川
に 玉藻なす 浮かべ流せれ そを取ると 騒く御民
も 家忘れ 身もたな知らず 鴨じもの「鴨自物」 水
に 浮き居て 我が造る 日の御門に：(①五)

和田論はこの「鴨じもの」を、役民が自分の姿を「何ともふがない鴨のような姿である」と認識したものと解釈する。役民が「現実の姿に対して、本来あるべき姿からかけ離れた憂うべき姿であるとする批判的省察を加える態度」であり、やはり死や別れに用いられた例と同様に憂いや嘆きの心が伴われているとして、へくジモノの統一的な理解を試みているが、これには従えない。この歌において天皇に奉仕することは「悲しむべき事態」ではない。ここは役民が自発的・積極的に造営にとり組む姿を描くことによつて天皇を讃美する文脈であり、役民が自らの姿を批判的に反省する場面とすることはできない。

むしろ注目されるのは、役民の奉仕する姿がひどく熱心なものとして描かれている点である。水場の力仕事は過酷かつ危険なものであるが、役民達は家に残してきた家族を思い出すこともなければ、我が身の危険を顧みることもな

い。人間性を欠いている印象すら与えかねない並はずれた献身ぶりであるが、このように描くことによつて、天皇が民から強い信望を集めていたことを効果的に表していると言えるだろう。同様のことが次の例にも言える。

(4)：鹿じもの「四時自物」 い這ひ拌み 鶺鴒なす い這ひ
もとほり 恐みと 仕へ奉りて：(③三五)
(5)：ひさかたの 天伝ひ来る 雪じもの「雪仕物」 行き
通ひつつ いや常世まで(③三六)

(4)では、臣下の者達が動物のように這いつくばつて皇子を拜んでいる。畏敬の念が高じたあまりの動作だとしても尋常ではない感じを免れないが、それがむしろ皇子が臣下の者達から一心に敬われていたことをうかがわせる。(5)では、作者をはじめとする家来の者達が主人の元へ通い続ける行為を、ひたすら降り積もる雪によせて描いている。人間の行動をあえて無機物の現象に重ねることによつて、永久に無心に仕え続ける決意を表し得ている。いづれも、通常ではとらない行動や通常では考えられないほど甚だしい程度で動作が行われている点で共通している。そう描写していることを表していると考えられる。

(6)：鹿じもの「十六自物」 膝折り伏して たわやめの
この傾向はへくジモノに広く認められる。

おすひ取りかけ かくだにも 我は祈ひなむ… (3)
三七九

(7) 御門の人も 白たへの 麻衣着て… 鹿自物
「い這ひ伏しつ… 侍へど… (2) 一九九

(8) …うち臥伏して 思ひつ 嘆き伏せらく 国にあ
らば 父取り見まし… 犬じもの「伊奴時母能」 道に伏
してや 命過ぎなむ (5) 八六

(6) は懸命に祈りを捧げる場面である。「かくだにも我は祈ひ」と自ら述べるとおり、祭式の煩雑な手順を丁寧なふむ姿から、作者が祈願の成就を熱望していることがうかがわれる。(7) では、主人の死を悲しむあまり、臣下の者達が動物のように這い伏して嘆いている。(8) は路上に行き倒れた熊凝が自分はこのまま死ぬのかと嘆く場面である。ここで「犬じもの」は、誰にも看取られることなく道に伏して朽ちてゆく変死に用いられている。このようにへ〜ジモノは、ある出来事において「普通はこうである・こうする・これくらいする」といった常軌のようなものから外れた驚くべき場面で用いられる傾向があると言える。これは(7)(8)のように「悲しむべき事態」で生じがちであるが、(3)などでみたように必ずしもそうとは限らない。

次に、比喻の仕組みの中で、へ〜ジモノのへ〜がどのようにとりあげられているかについて述べる。既述のよ

うに、現代語の代表的な直喩表現「まるで〜のように」と全く一致はしないものの、へ〜ジモノが比喻の一種をつくる表現であることはまちがいないだろう。へ〜ジモノは「まるで〜のように」と現代語訳できる例もできない例も、「いかにも〜という感じで」ある行為が行われている、と理解することができる。問題の(2)「男じもの―脇ばさみ持ち」も、男である作中人物が「いかにも男という感じ」で赤子を抱いたと理解すれば、「まるで〜のように」と現代語訳できる「鳥じもの」等と意味的に重なる部分が生じる。つまりへ〜ジモノは、ある動作・状態がとられているあり様を、その様をより端的に属性として備えている物や観念へ〜をもちだすことによつて、効果的に描写する表現である、と統一的に大づかみできそうである。そう見れば、へ〜部分に「鹿」「鳥」「雪」などの他、「男」「畏」といった属性を表すことばがくることも理解できる。以上のことをふまえた上で、へ〜ジモノが表す「〜という感じ」にはさらに独特の傾向を指摘することができる。へ〜ジモノはへ〜がもつ様々な要素のうち、通常へ〜に予想・期待される要素からは外れた要素をとりにたる傾向が認められる。

(9) 石上 布留の尊は たわやめの 惑ひに因りて 馬
じもの 縄取り付け 鹿じもの「肉自物」 弓矢囲みて

大君の 命みこと 恐おそみ 天あま離わかる 夷ひな辺へに罷まかる… (⑥二〇九)

シシは肉を食用とする猪・鹿などの総称であり、貴重な食料源として当時の生活を支えていたと考えられる。「(10)鹿待しかまちちに継つぎて行いかまし (③四五)」からは、シシは懸命に求めていく価値のあるものであり、「(11)ししくしろ黄泉よみ (⑨二〇九)」では、枕詞「ししくしろ(シシ肉の串刺し)」

が「良味」から同音の「黄泉」をおこしていることから、シシが美味なるものの代表であったことが知られる。「(12)高山たかみやまの嶺ね行くゆし」の友ともを多おほみ (⑩三九三)」からは、人々がシシを捕まえるためにその生態全般に通じていたことがうかがわれる。しかし、「鹿しかじもの」のシシにはそのような側面は見あたらない。(10) (12)がシシに普段寄せられていた関心だとすると、「鹿しかじもの」ではそれとは異なる要素——例えば、本能のみにつきうごかされ思考することのない獣あるいは所詮人間に狩られて屈服する獲物、といった要素——がとりたてられている。(9)の「鹿しかじもの」は、配流先に赴く罪人布留命に武器をつきつけているあり様に用いられている。このシシには人の力に屈従する下等で非力な獣としての要素が強い。これまでに挙げた例も同様である。(4)(6)(7)のシシにも(9)と同様、やはり自分よりも強い力にひれ伏す要素が認められる。また、畏敬の念が高じて(祈禱にうちこんで・悲しみにくれて)主体は目下の動作に没頭

するあまり、自我や自尊心への配慮が疎かになっている。(4)(6)(7)はシシという獣をもちだすことで、人らしい理性的な思考ができずにいるあり様を描写している。

同様の傾向が他のへ「ジモノ」例にも広く認められる。犬は「垣かき越こしに犬呼いぬよびび越こして鳥狩とりがする君 (⑦三六三)」に見えるように、生活の役に立つ賢い相棒という側面をもつていたはずである。しかし、「(8)犬いぬじもの」の犬は、死んでも放置され雨ざらしで朽ちていくものとして挙げられている。「鴨かひじもの」も同様である。鴨は「(13)水鴨みづかひなす二人並ふたりならぶび居あ (③四六六)」のように夫婦仲睦まじいものとして、また「(14)埼玉さいたまの小埼せうさいの沼ぬまに鴨かひそ翼霧はばきる己おのが尾おに降り置おける霜しもを払はふとにあらし (⑨二七四)」のように風情ある景物として詠まれることが多い。しかし、「(3)鴨かひじもの」の鴨は、浮遊という驚くべき行為をやつてのける動物として挙げられており、「(13)(14)のような趣は見あたらない。鴨にとつては何の苦もない浮遊も、当時の人から見ればとてもできない人らしからぬ行為である。危険な重労働に従事する役民の姿を、苦もなく浮遊する鴨に重ねることによって、動物じみた行為をも厭わない役民達の熱心な取り組みが表されていると言える。

(15)鴨かひじもの「可か母ぼ自じ毛もう能のう」浮うき寝ねをすれば蜷みなの腸わたか黒くろき髪かみに露つゆを置おきにける (⑮三六九)

挙げれば、「くらしい」は通常「く」に期待されるあり様に偏る。「男らしい」で言えば、体格では「上背がある」、気性では「勇敢だ」など、肯定的な要素に偏るのが普通である。それに対して、「くじみた」や「くさい」は、「く」の一要素ではあるが、否定的な要素に偏る。例えば、「所帯」は「所帯をもつて一人前」のように肯定的なイメージももっているが、「所帯じみた服」といえば「機能や価格重視でおしゃれ心がない・若々しさを失った」等の意味になる。「玄人」も「素人」の対義語として本来肯定的なイメージの強いことばであるが、「玄人くさい物言い」は「物知り顔の・通ぶった」といった意味になる。確かに「玄人」のもつ一要素ではあるが、「玄人らしさ」からは外れた否定的要素を「くじみた」がとりたてている。へくジモノはこのようなタイプの比喻をつくる表現であったと考えられる。

三 接辞ジ

初めに基本事項を確認しておく。「馬自物」「男士物」等の表記を見渡して分かるとおり、へくジモノはへ体言＋ジ＋物という構成であり、古くは体言に直接下接できる接辞ジが存在していたと考えられる。既述のように、期待される要素から外れた要素をとりたてるへくジモノの傾

向は文脈から生じたものではなく、へくジモノに内在している働きであると考えられる。ある要素に偏った比喻をつくる働きを名詞「物」が所有していたとは考えられないため、接辞ジの働きであると見てよいだろう。

(20) 高山と 海とこそば 山ながら かくも現しく 海ながら 然真ならめ 人は花もの「花物」そうつせみ
世人(13三三)

一般的な比喻は特定の要素に偏ることがなく、前後の文脈によって上接語の様々な要素が自ずと前面に押し出されてくる。(20)はへくジモノのジがない形として注目されるが、上接語「花」の否定的要素「一度しか咲かない・すぐにしおれてまう」とともに、「一度はあでやかに盛りを迎える」という肯定的要素も同時にとりあげられている点でへくジモノとは対照的である。これは「花もの」が特定の要素を指定する表現を含んでいないためであると考えられ、仮に「花じもの」という表現があつたとすれば、前者のみがとりたてられたと推測される。

さて、すでに指摘があるとおり、上代でジという形態をもつものにはへくジモノのジの他に、「時じ」などジ語尾をもつ形容詞と打消推量の助動詞ジがある。へくジモノと「時じ」のジは体言に下接している点で共通しており、同じものである可能性が高い。だが、打消推量ジは活用語

の未然形に接続するため、考察の対象から外す。遡れば同根であったとしても現資料からはたどれず、そうした接続の異なることばどうしを同一線上で扱うのは難しい。以下、用例にふれながら、形態・接続がへくジモノのジと同じであるジ語尾形容詞のジには、意味においても共通する点があることを指摘する。

上代でジの語尾をもつ形容詞には、時ジ・我ジ・家ジ・オモジ・オヤジ・オナジが挙げられる。ムツマジ・スサマジのように、形容詞の語尾シは鼻音系統の音に続く濁音になることがあり、オモジ・オヤジ・オナジはそうした濁音化と見て、ジ語尾形容詞の例には数えない。我ジ・家ジは用例がいずれも一例しかないため、時ジの例を中心にジ語尾形容詞のジの働きを考察する。

(21) 我がやどの時じき「非時」藤のめづらしく今も見てしか
妹が笑まひを (8) 二七

(22) 川の上のいつ藻の花のいつもいつも来ませ我が背子時
じけ「時自異」めやも (4) 四一

けて俣ひつ (1) 六

文脈から(21)「時じき藤」は季節はずれに咲いた藤、(22)「時じけ」は来訪の間の悪さ、(23)「風を時じみ」では風がすさまじくひっきりなしに吹いていると考えられる。これ

らの時じ)はいずれも、ある対象の動作・状態について、普通に予想・期待される何らかの「時」からはずれている点で共通している。(21)では「時季・旬」からはずれ、(22)は「適期・適切なタイミング」からはずれ、(23)では「常識的な継続時間」からはずれている。

(24) 然るに此の家の子どもは朕がはらからに在る物をや親
王たち治め賜ふ日に治め賜はず在らむとして……また、
此の家じく「此家自久」も藤原の卿等をば挂けまくも
畏き聖の天皇が御世重ねて、おもしき人の門よりは
慈び賜ひ上げ賜ひ来る家なり。(宣三)

(24)は、淳仁天皇が親王の官位を上げる際に、皇族ではない恵美押勝の子息達の官位も特別に上げることの理由を述べた部分である。「此の家(じく)」は直前にある「此の家(の子ども)」と同じであると考えられ、鎌足・不比等ら時の実力者と押勝らを重ねあわせた表現であろう。(5) 例文をモデル化すれば「(歴代天皇は、不比等達を) 此の家じく、慈び賜ひ上げ賜ひ」となり、歴代の天皇達が普通の臣下とは代々とりわけて(つまり、一臣下の家柄である常識的な待遇からはずれて)特別扱いしてきたと理解することができる。形態・接続を同じくするジ語尾形容詞のジは、やはりへくジモノのジと同じ働きがあると見てよいだろう。以上からジは、上接語について常識的に予想・期待される

あり様からはずれている状態を指示する機能をもった特殊な形容詞性接辞であったと考えられる。その場合へゞジモノは、シク活用形容詞の語幹に相当する「ゞジ」に名詞「物」が複合した複合名詞と理解することができ、

以上のことを踏まえつつ、接辞ジの意味領域を確認する。概念Aは様々な要素をもっていて、中でも常識的にAに予想(多くの場合期待を込めて)される要素群を仮にへAラシサと総称すれば、へAジが指示するのはAに含まれつつへAラシサ以外の領域に属する要素である。Aがへ男であった場合、へ男ラシサは「勇敢だ」、へ男ジは「がさつだ」等になる。注意したいのは、ジはAの範囲を越えた要素を指示しない点である。へ男ジはへ男に含まれながらへ男ラシサからは外されている状態であり、へ男に含まれない要素、例えば「女々しい」などを表すことはできない。従来のごとくの注釈・論文等が「男じもの」を「男らしくなく」と解釈しているが、現代語の「男らしくない」は一般に「優柔不断だ」「卑怯だ」など、へ男に含まれない状態を指すため、「男じもの」の解釈としては不適切であろう。さらに個々の語彙については、それぞれの上接語の意味的な影響を考慮しなければならぬ。例えば、へ時」は「時に含まれないもの」が通常存在しないため、へ時」を越えた領域がない。また、へ男」の場

合はへ男ラシサに属する要素とそれ以外の要素が肯定否定の評価と結びついて対立しやすいのに対し、へ時」の場合は句の果物が好まれると同時に、時季はずれの果物も別の意味で珍重されるように、評価として必ずしも対立しない。しかし、このような差は上接語の意味的な性質や用いられがちな場面に拠って生じたものであり、接辞ジの機能の統一的な理解を妨げるものではないだろう。

四 表記

「男じもの」「畏じもの」といった解釈できない例があるにもかかわらず、従来説がへゞジモノ」を「ゞではないが(まるでゞのように)」と否定語を含んだ表現として解釈してきた理由の一つに、「時じ」の表記がある。既述のようにへゞジモノ」とジ語尾形容詞のジは同じ接辞であると考えられるのだが、「時じ」には否定の文字「不」「非」をもちいて「不時とときじく」①「云・三三六・三三六」②「非時とときじき」③「云三三三」と表記された例がある。しかし、熟字訓においては、否定の文字で表記されていても否定語ではなかったり、逆に否定語が否定の文字で表記されないこともあり、否定の文字の有無が直ちに否定語か否かの決め手にはならないことがある。とりわけ補助動詞や語尾といった付属的な位置にあるものは、上接語と意味的に融合して原義が失われ

やすく、注意が必要であろう。そのような例としてカテニヤカヌが知られている。

カテヌ・カテニ・カツマシジ等は、橋本進吉(一九一〇)『「がてぬ」「がてまし」考』『上代語の研究』所収)が論じたように、動詞カツに否定語を添えたものである。専ら補助動詞として用いられるこの動詞カツについて、橋本説は「堪ふ」「敢ふ」または「得」といふやうな意義を有して居た」と推定し、その後木下正俊(一九五九「可能と不可能―カヌとカツ―」『万葉集語法の研究』所収)は四段動詞「勝つ」の可能動詞の形と推定している。いずれの説にしても、否定の意味は打消ズや打消推量ジなどが担っており、(25)(26)の表記を見て分かるとおり、カツ部分には否定の意味が含まれていなかったと考えられる。

(25) 梓弓引かばまにまに寄らめども後の心を知りかてぬ
〔勝奴〕かも (②九)

(26) 我が心ゆたにたゆたに浮き尊辺にも沖にも寄りかつ
ましじ 〔勝益土〕 (⑦三三)

しかし、この「カツ」の連用形と見られるカテを用いたカテニには様々な表記がみられる。

(27) 我はもや安見兒得たり皆人の得かてにす〔難尔為〕とふ
安見兒得たり (②九五)

(28) 佐保川にさをどる千鳥夜くたちて汝が声聞けば寝ねか

てなくに〔不難尔〕 (⑦三三)

(29) 夕されば君来まさむと待ちし夜のなごりそ今も寝ねか
てにする〔不勝為〕 (①三五六)

(30) 稲日野も行き過ぎかてに〔勝尔〕思へれば心恋しき加古
の島見ゆ (③三三)

(27)では本来ヘカテ+否定ニであつたはずのカテニが、形容詞「難し」と何らかの關係をもつと考えられる「難に」として表記されている。カテニはこの表記が最も多い。また、(28)のように「難」で表記したうえに「不」を添えた例もあり、表記に混乱が認められる。さらに、(29)(30)に見えるように、カテニを「勝」で表記した場合にも否定の表記を伴う例と伴わない例があり、やはり混乱が認められる。

カテニの表記が乱れる最たる原因としては、「くできない」ことと「くしにくい」ことが同意を表しがちであつたことが挙げられるだろう。橋本進吉論は「難の字は、その意義によつて「がてに」「がてなく」に宛てた」と述べ、異表記は意味的類似に起因すると指摘している。吉田金彦(一九七四「品詞分類と語史の研究へがてらへがてにすへがちなり」『訓点語と訓点史料』54)・(一九七七「国語意味史序説」)は、奈良から平安にかけて打消カテニが可能副詞カテに、さらに可能補助動詞カテナリへと繋がっていく初期において、万葉集のカテニが「不勝」「難」で表記さ

れていることに触れ、「困難だ・しにくい」という意味はもはや肯定側の表現であるように、打消ガテニはいつの間にか肯定ガテニに変わったのである」と論じ、首肯される。さらにいくつかの偶然的な要因——カタ(シ)とカテ(二)の音がたまたま似ていたこと・連用形に相当する否定ニと副詞句をつくるニが偶然同じ形態であったこと・その否定ニが衰退しつつあったこと——などがこの表記の混乱(大きく見れば語彙の変遷)を後押ししたと考えられる。

不可能の補助動詞カヌの成立については二説があるが、どちらも木下前掲論文の発案である。一つ目は、(一)

「私」の心が二つの相反する内面的な条件(例えば「会いたい」気持ちと「忘れてしまいたい」気持ちなど)を兼ねて(「引き受けて」)しまったということを元来意味し、その両立の不可能性から不可能の意味が生じてきたとする説。もう一つは、(ろ)カヌが未来を予想・予定する意味をもち、かつ、上代の用例ではカネツなど完了ツが下接することから、カネツは「〜と予想していた、それなのにできなかった」という流れで不可能の意が生じてきたとする説である。この二説の是非をここで問うことはせず、いずれの説でも補助動詞カヌは動詞「兼ね」を元とし、否定語を含んでいない点を確認しておく。

(3) ……音のみ泣きつつ たもとほり 君が使ひを 待ちや

かねて「兼手」む (④六六)

(32) 藤原の古りにし里の秋萩は咲きて散りにき君待ちかね

て「不得而」(⑩三六九)

(33) 岩が根のごしき山を越えかねて「不勝而」音には泣く

とも色に出でめやも (③三二)

(31)は正訓「兼」で表記されているが、(32)(33)は否定の表記「不」を用いた熟字訓で表記されている。カヌに否定の表記が用いられた理由は、やはり「〜しかねる」ことと「〜できない」ことが同意を表しがちであったからだろう。カテニとは逆に、本来は否定表現ではなかったものが、意味の近似から否定の熟字訓で表記されたと考えられる。ジ語尾形容詞「時じ」が「不時」「非時」と表記されたのも、カヌと同じ事情であったと考えることができる。とりわけ名詞「時」は、「(34)大船にま梶しじ貫き時待つと我は思へど月を経にける(⑮三七九)」に見えるように、単独で「それにふさわしい時・適期」を表すことができる。そのため、否定的な意味内容を表しがちな肯定表現「時じ」の「適期をはずしている」は、否定表現「その時ではない」と意味的に重なりやすかったのであろう。

五 おわりに

上代特有の接辞ジは、上接語(物や観念)について常識

的に（多くの場合期待をこめて）予想されるあり様からはずれた状態であることを指示する特殊な形容詞性接辞であったと考えられる。上接語は発話者が描こうとしている出来事を形容するためにもちだされてきたのであり、上接語に常識的に期待されるあり様から外れた状態にあると発話者が判断したということは、発話者にとってその出来事が何らかの驚くべきものであったことを示している。これに名詞「もの」を複合せせたものがへゞジモノである。ほとんどの例がへゞ主体―動作で表されるある出来事の中に挿入句のように割り込まれ、体言言い切りの形で言い放たれている。へゞジモノのモノは「（のような）もの」という一括りの一般概念を作成する用法であったと考えられる。すなわち、その出来事が発話者にとって既成の一語による概念では表しきれないものであったことを示しているだろう。へゞジモノにおける文脈の傾向ととりたての傾向は、接辞ジと名詞モノのこのような働きが相俟って生じていると考えられる。

上接語に動物が多いのは、それぞれの動物がもっている人間性とは相容れないような獣じみた要素をジでとりたて、それを敢えて人間の行動に重ねることによって、その光景が何らかの意味で人らしからぬ驚くべきものであったことを表現しようとしたためであろう。(3)(4)(6)(7)などは、獣じ

みた行為も厭わないほど主体にある感情（畏敬の念や成就への熱意や悲しみなど）が高じていることを表している。

これは上接語が動物ではなく物である(5)「雪じもの―行き通ひつつ」にもあてはめることができる。ここでは人間のような感情や意志をもつことがない雪の、ただひたすら降り続けるという機械的な「物じみた」要素をジでとりたてている。それによって、人間がどうしても抱いてしまう迷いや裏切りなどの気持ちとは無縁の、無心で不変の忠誠心を表していると理解できる。(8)(9)(15)などは、主体が獣じみた行為をせざるを得ないほど何らかの大変な出来事が起こっていることを表している。これは(1)「鳥じもの―朝立ちい行きて」にもあてはめることができる。泣血哀慟歌の二一〇番から、「我妹子」の死は「我」の予測できない突然の死であったことがうかがわれる。我は我妹子に絶えず会いたいと願いながらも世間の目を憚り、「後も逢はむ」と心に期しつつ人知れず恋慕っていた、その折りしも「渡る日の暮れぬるがごと照る月の雲隠るごと沖つ藻の靡きし妹は黄葉の過ぎて去にき」と続いている。ここでは人間の心情などまるで理解することのない鳥の、獣としての要素をジでとりたてており、妻の突然の死をこちらに見向きもしないでさっと飛び立っていってしまう鳥に重ねている。それによって、心の準備をする暇も別れの情を言い交わす機

会も与えられず突然取り残されてしまった私の悲しみと戸惑い、そのような死に方をしなければならなかった我妹子の哀れさを表している」と理解できる。

このジにそのまま相当する現代語は見あたらない。期待される状態とそれから外れた状態が、肯定・否定の評価として明確に対立する場合には「くじみている」「くくさい」が該当することがあるが、既述のようにあてはまらない例も多い。そのような例の現代語訳には「へ〜ジモノ」の意味機能が訳出されるように適宜ことばを補ってよいだろう。

(35) 我が皇 太上天皇の 大前に 恐じもの「恐古土物」進退
ひ 匍匐ひ 廻ほり 白し 賜ひ 受け 賜ら くれは … (宣六)

(36) 鹿子じもの「可胡自母乃」 ただひとりして 朝戸出
の かなしき 我が子 … (20四四〇八)

(37) 己が身し 労はしければ 玉杵の 道の 隈廻に 草
手折り 柴取り 敷きて 床じもの「等許自母能」 うち
臥い伏して … (5八六六)

(38)は聖武天皇が畏まって元正上皇に助言を請う場面であり、似た例が第十四詔にも見える。注(6)で一案を示した「我じく」や(4)のように、この「恐じもの」も畏まるという状態の中に含まれる相手に服従しへつらうような要素をとりたてていると考えられ、例えば「へつらうほどに・まるとおもねるように(それほどまでに畏まって)」といっ

たことばを添えるとジの機能を訳出できるだろう。(36)は息子が徴兵される場面である。一産一子である鹿の子はいつもぼつんとさびしうに見え、そのようにわが子も旅立つて行く意であろう。ジは「鹿子」の中の「独りぼつちで心細そう」という要素を取り立てていると考えられ、「独りぼつんと・さびしく心細そうに」といったことばを添えてよいだろう。(37)は熊凝が行き倒れて草の床に伏している場面であるが、草の床は人の最後を看取るべき本物の床にはほど遠く、床にはいるが床らしい床とはとも呼べるようなものではなかったことをジが表していると考えられる。これは「かろうじて床のようにして」等のことばを補うとジの働きを訳出できるだろう。なお、へ〜ジモノの上接語「床」が「臥い伏す」の動作主体以外に重なるのはこの例だけではない。(9)においても縄を取り付け弓矢で囲んでいる動作の主体は兵士達であり、上接語「馬・鹿」は動作の対象にあたる「布留の命」に重なっている。(1)「(妻ハ)鳥じもの―朝立ち行き」(2)「(我ハ)男じもの―脇ばさみ持ち」等の例を見ると、へ〜ジモノは直後の動作・状態をとる主体の様子を表す副詞句のように感じられ、そのためへ〜ジモノは主体を直喩することによって用言を起こす枕詞であると位置づける説もあるが、(9)(37)からへ〜ジモノはへ主体―動作で表されるある光景全体を

広く引き受ける挿入句的なものであると考えられ、枕詞とは異質である。

注

(1) 本文や歌番号の引用は、万葉集：新編日本古典文学全集『万葉集』小学館（一九九四）、記紀歌謡：日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店（一九五七）、続日本紀宣命：新日本古典文学大系『続日本紀』岩波書店（一九八九）に従う。書名を添えない番号は万葉集のもので、丸数字が巻・漢数字が歌番号を表す。

(2) 『岩波古語辞典』（一九七四）の「じもの」項目に、「[らし]」「めき」など、：らしい、：の様子だと訳される接尾語は共通して二つの意味をもつ。一つは、別のものなのに、あたかもそれらしい感じ、様子だという意味。二つは、事物が本当にそれらしい感じ、様子をしているという意味。「じもの」にもその二つの場合がある」という指摘があり、大まかな方向として首肯される。

(3) 「らし」は推量「らし」を元として、本来、いかにも「し」を感じさせるあり様には何でも用いることができるのだが、多くの場合期待される肯定的なあり様を表す。

(4) 上代のク活用形容詞語幹は、単独で名詞的に用いられたり、「いや高に」のように単独または二を伴って副詞的に用いられたり、「高つ鳥」のように単独または連体助詞を伴って連体修飾語になるなど独立度が高く、元は

状態的な概念をもつ独立性のやや弱い体言であったと推測されている。形容詞カシコシには「かしこの坂」「恐乃坂」〔⑥二三〕という例があり、語幹カシコは体言に準じる性質をもっていたとみてよいだろう。

(5) 新日本古典文学大系『続日本紀』は「此の家じく」について「この押勝の家ではないが、この家と同様に」と注しているが、不比等らと押勝らを分けて解釈するのは不適當であろう。「藤原の卿等（≡不比等ら）」は押勝の子息の官位を今回特別に上げることの根拠としてもちだされてきたのであり、同じものと考えられる直前の「此の家（の子供）」が明らかに押勝らを指していること、さらに問題の「此の家じくも」は副詞的に「（藤原の卿等）を」慈び賜ひ上げ賜ひ来る」を連用修飾していることから、不比等らと押勝らを重ねあわせる表現と考えられ、不比等を筆頭として代々特別扱いしてきたのだから今回も特別に押勝の子息の官位を上げるのだ、と解するのが文脈に適っているだろう。

(6) 「立ち別れ君がいまさは磯城島の人は我じく」〔和礼自久〕齋ひて待たむ〔⑩三〇〕は、「我」を作者ととるか「敷島の人」ととるか、また「敷島の人」は「君」が訪れる先の人々ととるか残された人々ととるかによって歌意が幾通りにも分かれ、文脈からジの働きを求めにくい。上接語について通常期待されるものから外れた要素をとりたてるジの働きから考えると、「我」は作者であり、敬愛する君を一心に待つ作者の姿はへつらいおもねると

いった否定的な感じを帯びるほど一途であつて、人々もそのように（「私」みても）平身低頭の体で「君」をお待ち申している、の意であらうか。一案を示すにとどめる。

(7) 形容詞語幹に二がついた副詞句には「高に」「遠に」などがあり、その法則に従えば「難に（カタニ）になるはずであるが、カタニの確実な例はない（許己波故賀多尔（⑭三三三）のみ「こは来難に」と訓む可能性があるが確実な例とは言いがたい）。しかし、カテニの多くが「難」字で表記されていることから、「難に」が形容詞「難し」と密接に関わることばとして異分析されていたことは認めてよいだろう。

(8) 木下（一九五九）では（い）が本案で、（ろ）が別案である。後に、近藤明（一九八八「接尾語カヌの下接語の時代的变化―助動詞ツとの関係の衰退―」『国語学』一五二集）が（ろ）を補強し、さらに吉井健一（一九九九「上代における不可能を表す接尾動詞―アヘズ・カヌ・カツ十否定辞」『井手至先生古希記念論文集国語国文学藻』）が近藤説を批判しつつ（い）を補強している。研究史は吉井論に詳しい。

(9) 上代において複合名詞後項に位置する「もの」は、「毛物」「織物」「鱈狭物」のように物品など実体を持った物体を表すことが多いが、「うまし物」「美麗物」いづくも飽かじを（⑬三三三）や（20）「花もの」のように一括りの概念「（のような）もの」を表す用法もあり、（へ）ジモノもそれであると考えられる。なお、後代に

は文末で文全体を受ける「もの」が主に逆接の接続助詞となつていくが上代ではまだ弱く、まして複合名詞の後項に位置する「もの」が「（のような）もの」といった接続助詞化しつつあるとは考えがたい。

(10) 柿本人麻呂の泣血哀慟歌は巻二・二〇七番と二一〇番の二首の長歌とそれぞれの短歌、続いて二二〇番の異伝と考えられる二一三番とその短歌から成っている。「鳥じもの―朝立ちいまして（②三〇）」「鳥じもの―朝立ちい行き（②三三）」の動作主体である「我妹子」は、二〇七番歌の「我妹子」と同じ人物として考えてよいだろう。

(11) 「男」に期待される要素が直ちに「勇敢だ・潔い」と指摘できるのに対して、「雪」「鳥」などに期待される要素がどのようなものであるのか直ちに指摘しにくい。これは日常生活の中でそのものらしさがどれだけ意識されるかに拠ると考えられるが、そのものらしさが明確に把握されていなくても、「うらしさ」から外れた要素をとりたてることは可能であらう。「動物らしさ」を直ちに指摘できなくても「動物じみた」あり様といえ、動物のもつ様々な要素のうちで動物に通常期待されない否定的な要素に偏った状態であることは理解できる。

(12) 近年の諸注釈書が解釈するとおり、出兵していく子が一人っ子であつたという意ではないと思われる。